

著者の背中を追って

石村柳三詩論集『時の耳と愛語の詩想』

芳賀 章内

〔時のしからしむ耳と詩人の詩性〕より〕

独り行く精神の見者のごとく、求道する言語人であって欲しい。右にふらふら左にふらふらするオボチユニストではなく、時流に逆らうことも詩い、さげふ詩人であって欲しい。ただ詩人の衣を着た《てんぷら詩人》ではなく、真味を問う味わう詩人を理想とせよ。

そういう詩人たれ。詩人像たれ。

遍歴しつつも、愛情のある詩言語を放つ時の旅人の精神を背負って。

自らを視つめ、問い、思索する歩みを堅固する詩人たれ。

ニーチェのいう「精神の苦行僧」を忘れぬ、真味を呼応する詩人となれ……。

少し長くなったが、私の拙文よりも説得力があるだろう。これが著者石村柳三の詩人に対する要望であり、理想の詩人像なのである。ここからも判然とするように、詩人は「苦行真味」探求の求道者でなければならず、作者はそこにしか詩的美は見出されないのだ。著者はとり立てて、表現論は語らないし、美的世界とは何かについても同様にとくに直接は語らない。それに対して、詩人の在るべき姿、自然との関わりの内実については、仏的世界を通して、徹底的に構築してみせる。終局的に、仏教的に求道、修行による真味への接近把握の状況の中に、美を見出している。だから氏は求道者の道を歩む、菩薩道を見据えて、修行者の道を歩む。詩はその行為の中に煌めき、言語となつて表出される。

もしこれを、詩言語の効用から見たらどうなるだろう。詩言語は本来詩的美以外にその奉仕の力を發揮しない。従つて、無信仰であっても人の深奥を打つ心的世界は創造できる。作り出された美の世界は無償であり、しかもその美の形は感動となつて把握できる。

信仰もまた感動を伴う。そこに信仰と詩の交流する場が見出される。信仰者の説得力がいや増す場といえよう。そこに「時のしからむ耳と詩人の詩性」があり、「愛語」と詩的精神が見出されるということであろう。氏の先の評論集『雨新者の詩想』は「……〈仏の教え〉は、時代と場所を超えて常に新鮮な輝きを放つものだという」仏説の言葉を核として論旨を展開していたが、本書においての詩と信仰の合一する場が《愛語》であるというのは、概論的主旨から、内面的な深い場所へと希求の場を移動しているという事由を示し、

氏の求道の深度がさらに増したことを示しているといえよう。

《愛語》という言語は魅力的だ。さらには「《愛語》と詩的精神」を組み合わせたその視点は、まさに最高度の内容認識を示しているといえよう。そしてこの言葉は、道元の『正法眼蔵』の中にあるという点からみると、氏の単に宗派的に存在せず、広く仏教の教理をまさぐるその態度は、グローバルな今日に照応しているという点で、これまた一級詩人の「時」の認識を示し、仏法の普遍性を静かに強調していると記すことができよう。いうまでもなく芸術美は、人間の善行美とは必ずしも一致しない。氏のいう「右にふらふら」「左にふらふら」であっても、悪であっても、醜であっても、芸術美は構成できる。その中にあるとお菩薩道を主張するところに氏の骨頂があるといえるのである。そしてそれは誰も否定はできない

い。創造の拠点は個の感性であるからだ。何よりも氏は、求道者なのだ。菩薩道を歩む菩薩なのだ。今日の菩薩としての在りようを、氏は自らに厳しく課しているように見える。

氏はその自らの成長の場を広げる。それが「時」の認識にも繋がっている。六根を通して把握する認識は、フッサールの現象学やメルローポンティの『知覚の現象学』的な実存構造とも関連して考えられる。観念的世界でなく、常にヴィヴィッドに問いかけてくるのは、氏の肉体的内面の動態と呼応しているからであろう。以下本書は、これまでの基底的論考を踏まえて多面的な批評精神を開陳する。それは緻密性に満ち、斬新であり、自在にほとぼる氏の感性の展開は豊かである。その融通無碍の感性は、改めて氏の教養と分析力を物語り、本書の厚みと広がりをもさらに確かなものとして、証明する役割を果たしているといえよう。

時の本質と言葉の慈悲を記す人

石村柳三詩論集『時の耳と愛語の詩想』

鈴木比佐雄

石村柳三さんは二〇〇七年春に第一詩論集『しんしゃ 新者の詩想』を刊行した。それから四年半の間に書かれたものを中心に今回は、第二詩論集『時の耳と愛語の詩想』としてまとめられた。『雨新者の詩想』について私は、仏教思想を根幹に据えた本格的な詩論は、現役の詩人では石村さんしかないこと、三十年間にわたる千葉県の詩人たちや故郷の青森の詩人たちへの数多くの詩人論などを含めて、まとめるべき資料的な価値があると考えていた。そして躊躇っていた石村さんの背中を押して刊行に至った経緯があった。この詩論集によって石村柳三さんの存在は、全国の詩論に関心ある詩人たちに広まったことは間違いない。

※

めっきり冬の日射しとなってきた。寒の中でも本書は心暖まる。この日射しは貴重である。すつきり立っている自然体を感じさせるからであろう。この自然体で社会を暖かく包む著者の希求の精神に、前著作『雨新者の詩想』の某の末尾に添えたように、スッタニパーターの一文を記して、本書刊行の喜びを分かちあいたい。

—— 慈しみと平静とあわれみと解脱と喜びとを時に応じて修め、世間すべてに背くことなく、犀の角のようにただ独り歩め。

石村さんもその反響の大きさに驚かれて、刊行して本当に良かったと私に告げてくれた。私は石村さんとはこの十年間に一緒に鳴海英吉研究会を担い、石村さんの自宅周辺で互いの詩や詩論をじっくり話し合う関係であった。その際に石村さんから底知れぬ宗教学・文学の知識や情熱を感じると同時に、いつも詩作や評論に転化させていく創造的な行為に驚かされていた。そして何よりも痛感するのは、石村さんは誰よりも謙虚であり、多くの詩人や思想家の長所や美点を直観し論証できる読解力と豊かな詩的精神を体現していることだった。その意味で石村さんは詩を通して菩薩道を追求している方なのだと感じさせてくれるのだ。石村さんは二〇〇七年秋に第一詩集『晩秋雨』、二〇一〇年春に第二詩集『夢幻空華』の二冊の詩集を刊行した。そして今回の詩論集と同時に第三詩集『合掌』を刊行した。石村さんは私が出会っ

た二〇〇〇年の頃にはすでに週に三回の透析を開始していた。透析以外にも幾つかの持病を抱え肉体的にも困難な日々であるにも関わらず、決して執筆をやめることはなかった。石村さんと話す下次から次に書きたいテーマを溢れるように語られる。無類の読書家でもある石村さんは、本当は控えて寡黙な方なのだが、書くべきテーマになると話が止まらなくなってしまう。石村さんの書きたいものは、誰も気付いていないが、今の時代がもう一度省みなければならぬ人物とその思想の本質を洞察しようとしている。石村さんは現代の日本人が忘れてしまった宗教と文学を成立させる柔らかな精神に立ち還っていく根源的な思索力に基づいている。

石村さんの仏教的な詩論の特長は、宮沢賢治と同様に法華経に多大な影響を与えられている。前回の詩論集『雨新者の詩想』では、法華経の精神

が雨のように降ってくると、人間は絶えず新しく生れ変わっていく祝福された存在であるのであり、優れた詩的精神には、そんな人間を新しくさせる精神があり、多くの人びとを感動させるのだと力説していた。今回の『時の耳と愛語の詩想』では、法華経の根本精神から影響を受けた日蓮の「時の耳」と道元の「愛語」の考え方を詩論の中心に据えて論じて、以前の詩論集をさらに深く展開している。とりわけ一章の冒頭の『愛語』と詩的精神、「二番目『石』について―その沈黙の根源詩性を求めて」、三番目の「時のしからしむ耳と詩人の詩性」は、石村さんの詩思想を粘り強く明快に語っている。

『愛語』と詩的精神』では、石村さんによると道元の『正法眼蔵』の「菩提薩埵四摂法」の中に菩薩道の実践方法が説かれていると言う。その「布施」「愛語」「利行」「同事」の四摂法の中とすることが、「自然界の詩性」を汲み上げることを可能とさせ、最終的には「愛語」を聴き取り、愛語を実践することになると石村さんは語っている。

で、石村さんは道元の言う「愛語」に焦点を当てて、「愛語」とは、「慈愛」の心を言葉に表すことであり、他者を思いやり言葉を実践することによって「やすらぎの精神世界」を作り出すことだと石村さんは読み解いていく。「愛語は愛心よりおこる。愛心は慈心を種子とせり」という道元の言葉を引いて「慈しみ思いやる言語」が人間社会の変革を促すと同時に、人間の内面の変革を促す精神に働きかける詩的言語に関わることを指摘している。石村さんは詩的言語の根底に人間社会を良くものしていきたいという「愛語」の精神を発見しようとする詩論家なのだ。

また『石』について―その沈黙の根源詩性を求めて』では、自然の巨大なエネルギーに人間が謙虚に向かい合うために『石』の沈黙に耳を傾けるべきだという。「万年億年の自然歴を呼吸しつつ、沈黙を閉じてきたふかい石の心音」を聴こう

さらに「時のしからしむ耳と詩人の詩性」では、「優れた作家や詩人、言論人、学者の眼や耳や精神には、予見的な時（時代）を見抜く感性があり、中でも宗教者と詩人の「予知者の能力」を考察している。石村さんは、日蓮の語った「時のしからしむ耳」が、「時||時間・季節・風土・時代」の民衆の矛盾や苦悩や悲しみを聴き取るうとする試みであり、そんな高貴な精神は、予知能力のある詩人の精神性と同じものであると指摘する。石村さんは宗教と芸術の垣根を超えて、人間が自然の深い沈黙のエネルギーに感応することによって、「時の耳」という根源的な時間の働きを知り、豊かに生きられる精神性を詩論の中で語ろうと試

みている。このような詩論の試みは現役の日本の詩人の中で石村さんしか論究していないのであり、きつと多くの詩人たちや詩を愛する人びとにとつても良き手引きの書となるに違いない。

二章「詩人と批評精神」では十九名の詩人論と二冊の詩選集の書評が論じられている。三章「定型詩人と作家たち」では、七名の俳人・歌人・作家たちの文学精神を解き明かしている。四章「詩人と校正」の十八編では、石村さんがその時々々に切実に感じた思いをまとめたエッセイ・論考や、詩論集や詩集を刊行した際の思いなどを収録している。五章「詩誌・詩集評」は、関係した詩誌で長年書き継いできた詩誌評や詩集評が収録されて貴重な資料となっている。六章は三つに分かれていて、「①講演・座談会記録」は「鳴海英吉研究会」での石村さんの講演や発言が再録されている。また「② 千葉県の詩運動」では、長年関

わってきた千葉県詩人クラブや詩誌「玄」、「光芒」や「短説」などの詩運動の記録を収録している。最後の「③ 短説と詩の解説」では、「短説」の作品群の詳細な論評である。

前回の詩論集『雨新者の詩想』と今回の詩論集『時の耳と愛語の詩想』によって石村さんの実践的な詩論の全貌が明らかになり、きつと詩を書きたいと願う詩人たちを「愛語」の精神で励まし、「時の耳」で鼓舞し続けるだろう。また多くの詩を愛する人びとにも読んで欲しいと願っている。

石村柳三詩論集

『時の耳と愛語の詩想』栞解説文
芳賀章内・鈴木比佐雄

コールサック社

2011